
会長からの激励メッセージ

日本放射線化学会会長

中川 和道

400年に一度かという巨大な規模の東北地方太平洋沖地震により、命を落とされた方々のご冥福をお祈りします。また、被災された皆様とご家族の方々に心からお見舞い申し上げます。一日も早い復旧がすすみ、被災者の皆様が安定した生活を取り戻せますようにと願っております。

私は1995年の阪神・淡路大震災を経験しました。震度7の揺れに見舞われ街も人も大きな被害を受けました。今回の地震では、原子力機構東海から「あの時の揺れプラス津波だ」との報告をうけて間もなく原子炉被害がそれにプラスされました。我々は今、地震・津波・放射線と戦っています。

放射線化学会には東北大、原子力機構東海研、つくばの各研究機関、東電はじめ原子炉に関係する会員がおられ、多くの方々が業務者として生活者として日々大変なご尽力の最中であり、放射線化学会会長として激励のメッセージを送ります。

当面の課題は原子炉の安定化であり、それとともに放射線に対する対策が急務です。現場での実務的な放射線対策はもちろんのことですが、原子炉や放射線に対する解説の活動などバックアップ活動も重要です。現状の高校での履修状況や大学でのカリキュラムをみますと、原子炉や放射線に対する国民の知識は理科系大学卒業者といえども不十分であり、放射線化学会の会員には多くの場面で事態の解説が求められるものと思われ、私もすでに2回の臨時講演を行い、その有用性を痛感しました。

分子科学研究所では博士課程後期の院生なら申請代表者としても申請できる共同利用枠を早々と設定するなど、研究教育活動の早期回復を支援する動きがいろいろな機関で始まりつつあります。卒業を控えて就職活動中の学生院生、博士や修士の学位取得を目前にした院生、若手研究者などにも格段の対策を実行し、学術の維持をはかる必要があります。

放射線化学会としても必要な対応をとっていきます。会員の皆様方におかれましても、この状況を打開し前に進んでいく活動にぜひご尽力をお願いし、今回の震災の被災者の皆様に対する激励のメッセージといたします。